

◆パイプをもらったホエルオー

昔々、インディアンにタバコが好きで歌の上手な、クロスカップという男の人がいました。クロスカップがある日、用があつて海を渡ることになりました。でも、クロスカップは泳ぐのが上手ではありません。そこで

♪ほうい ほうい

♪ちよいと頼みたいことがある

♪お礼はするから だれか来てくれないか

♪ほうい ほうい

と海岸に立って歌うと、ホエルオーがやって来ました。

「ちよいと海の向こうまで運んでくれないか」

「おあいご用です」

ホエルオーはクロスカップを背中に乗せてくれました。

「落ちないよう、しっかりつかまってくださいね」

そう言ってホエルオーは全速力で泳ぎだします。

「お前さんの背中には広いんだ、大丈夫、大丈夫」

からからとクロスカップは笑って答えました。クロスカップはきざみタバコをパイプにつめると、ふかりふかりとふかします。

しばらくして、一羽のペリッパーがやって来ました。ペリッパーは親しげにホエルオーとあいさつを交わすところ言いました。

「煙が見えたからなにごとかと思ったら、人を乗せていたんですね」

「煙？」

ホエルオーには背中の様子が見えていなかったもので、不思議そうに聞きました。

「ええ、あなたの背中で、パイプをふかしていますよ」

ホエルオーがそれを見たいと言うと、クロスカップはもちろんいいともと、ペリッパーにパイプをくわえてもらって、ホエルオーの目の近くまで運んでもらいました。

「これがパイプですか……」

ペリッパーはクロスカップにパイプを返すと、別れのあいさつをしてどこかへ飛んで行ってしまいました。

やがて向こうに、目的の島が見えてきました。ところが急にホエルオーのスピードが落ちてきて、とうとう止まってしまいました。

「どうしたんだい、ホエルオー」

「このまま進むと、お腹が海の底につかえてしまいます」

心配そうにホエルオーは言いました。

「なあに、大丈夫さ」

とクロスカップが笑っているの、ホエルオーはまた進み始めました。でも、やっと島に着いた時、やっぱりホエルオーのお腹は浅瀬に乗り上げてしまいました。

「ほら、あなたのせいですよ。もう、海に戻れない、どうしましょう……」

ホエルオーはしくしくと泣き出してしまいました。あんまりにもホエルオーが泣くものです

から、クロスカップは大慌てで謝りました。

「悪かった、悪かった。今すぐ海に返してやるから泣かないでくれ」

クロスカップは、背中から器用に滑り降りると、ホエルオーの頭をえい、えいと力いっぱい押しました。すると、ずず、ずずず、とホエルオーは砂の上を滑り出しました。さらにクロスカップが押し続けると、ホエルオーはまた元のように海にふかりと浮かび上がりました。

「ああよかった。これで帰れます」

「ごめんよお、ホエルオー」

そうクロスカップが謝ると、いいんですとホエルオーは答えました。

「さて、ここまで乗せてくれたし、迷惑もかけてしまった。なんでもお礼をしよう、何がいい？」

クロスカップが聞くと、ホエルオーはちよつと悩んで言いました。

「では、あなたのそのパイプとタバコをくれませんか」

「いいともいいとも」

クロスカップはパイプとありったけのきざみタバコをホエルオーに渡してあげました。ホエルオーは、さっそくパイプをくわえて、喜んで帰って行きました。

皆さんは、ホエルオーが潮をふくと思っているでしょう。けれど、本当はクロスカップにももらったパイプをふかしているのですよ。

